放送大学研究年報　第39号（2021）67-76頁
Journal of The Open University of Japan, No. 39（2021）pp. 67-76

エーリヒ・ケストナーの後半生と「小人」の物語

佐　藤　和　夫[1)]

Erich Kästners zweite Lebenshälfte und seine Kinderromane mit dem Titel „Der kleine Mann“

Kazuo SATO

要　旨

エーリヒ・ケストナーの後半生の起点はわかりやすい。年号で言えば1945年、月は５月である。つまり、ドイツ第三帝国が戦争の敗北を認めた５月８日と言い切っても差し支えない。というのも彼の前半生と後半生はナチスに作家としての存在を否定されたおよそ12年間の「執筆禁止」時代をはさんで截然と区別することができるからである。もちろん、禁止された時代であっても刑務所に入れられたわけではない。逮捕や預金封鎖をされるなど嫌がらせのような仕打ちを受けはしたものの、「ふつうの」市民生活を送っていたし、偽名を巧みに使い分け、隠れた作家活動を行ってもいた。あまりに単純化することはできないにしても、前半と後半を分ける明白な目印にはなる。本論ではこの観点からケストナーの後半生を論じることにする。そしてこの時期の特徴的な作品である二つの「小人」の物語に焦点を当てて分析を行う。

ケストナーにとっての戦後は避難先のオーストリア・チロル地方から始まるが、作家としての活動はミュンヘンが拠点となった。本来戻るべきベルリンは彼の嫌うソ連邦の占領下にあり、選択肢とはならなかった。加えてケストナーにはアメリカ軍占領当局から有利な仕事の提供があったことから、その占領地区の中心であるミュンヘンが仕事の場となった。そしてそこから彼の精力的な活動が再開され、西ドイツの文壇の統合にも貢献した。もちろん公的な場だけでなく、私的生活でも精勤ぶりを発揮している。以下においてはそのことにも触れつつ、彼の後半生についてまとめることとする。

ABSTRACT

Wann Erich Kästners zweite Lebenshälfte beginnt, kann man so anschaulich sagen：das Jahr ist 1945 und der Monat Mai. Noch klarer gesagt, der 8. Mai, an dem „das dritte Reich“ kapitulierte. Denn zwischen der ersten und der zweiten Lebenshälfte Kästners liegt eine große Lücke, wo seine Betätigung als Schriftsteller verboten war. Die Zeit des Stillstandes dauerte 12 Jahre：von 1933 bis 1945. Die Zeit vor 1933 kann die erste Lebenshälfte genannt werden und die nach 1945 die zweite. Der verbotene Schriftsteller konnte sein Schreiben zwar nicht öffentlich machen. Er verbrachte jedoch mit einigen Ausnahmen ein normales Leben und machte unter Pseudonymen Schreibarbeit. Man sollte die Sache nicht zu sehr vereinfachen, aber das Jahr 1945 ist doch ein deutliches und bemerkenswertes Merkmal. In dieser Hinsicht soll diese Abhandlung besonders seine zweite Lebenshälfte schildern und zwei Kinderromane mit dem Titel „Der kleine Mann“ erörtern, die Kästners Nachkriegszeit charakterisieren.

Die Nachkriegszeit ging bei Kästner vom österreichischen Tirol aus. Es war ihm aber nicht ein Arbeitsplatz, sondern nur ein Zufluchtsort. Wenn es möglich gewesen wäre, wäre er gern nach Berlin zurückgekehrt, wo er seine glänzende Karriere gemacht hatte. Die Hauptstadt der Weimarer Zeit hatte aber leider schon das einmalige kulturelle System verloren. Überdies besetzte den Ostteil die Sowjetunion, die er nicht mochte. Schließlich entschloss sich Kästner, als seine Werkstatt München zu wählen, weil die amerikanische Besatzungsbehörde ihm begünstige Arbeitsbedingungen anbot. Er nahm das Angebot an, begann energisch wieder zu arbeiten und widmete sich der westdeutschen literarischen Szene. Seine aktiven Betätigungen wurden nicht nur im öffentlichen, sondern auch im privaten Leben entfaltet. Der vorliegende Aufsatz soll inklusive der persönlichen Angelegenheiten Kästners zweite Lebenshälfte zusammenfassen.

[1)] 放送大学茨城学習センター　所長

1. ケストナーの活動期区分

ケストナーの作家としての活動期はおおむねその滞在地と一致する。

1）ドレスデン：バロックの都市美に包まれた揺籃期であり、ここで大学入学までを過ごす。

2）ライプツィヒ：学生として文学、歴史、新聞学など古典から新興の学問に励んだ胎動期であり、新聞・雑誌を媒体として文章修行に励んだ。

3）ベルリン：詩人として、子どもの本の作者として多くの同時代のライバルたちとの競争の中で頭角を現す。しかし、５年ほどで1933年１月を迎え、執筆を禁止される。以後は匿名・偽名による作家活動を余儀なくされる。

4）ミュンヘン：かつての滞在地はすべてソ連邦の占領地区となり、また仕事の依頼がアメリカ占領軍から来たこともあり、以後の活動はミュンヘンが中心となる。単に作家としての復活にとどまらず、作家たちのまとめや支援活動も重要な仕事となる。

いずれの時点からケストナーの後半生とするかについては、細かいことに拘泥しなければ、1945年、ドイツの敗戦後のミュンヘン時代を当てはめても差し支えないと思われる。ナチス時代の12年間の逼塞状況から解放され、ようやく実名で作家活動を開始し、一方で文壇の中心人物としてドイツ文学の「顔」ともなるからである。

2. 活動の再開

ドイツが公式に敗戦を認めた1945年５月８日、ケストナーはチロル地方のマイアーホーフェンにいた。ナチス政権成立後もベルリンにとどまり続けたが、ナチス体制への非協力者を抹殺するという噂も流れ、ベルリン自体も混乱をきわめたため、オーストリアへ難を避けていたのである。12年間の逼塞と二ヶ月間の退避期間を経て作家としての活動を本格的に再開するときがようやく訪れたが、問題はどこを仕事の場として選ぶかであった。

平時なら当然ベルリンしかありえないが、戦争末期に徹底的に破壊され尽くしたという噂も伝わってきており、しかも占領しているのはソ連軍であった。ケストナーはブレヒトのように共産主義者ではなかったから、特に引きつけられることはなかった。むしろその逆だった。彼はかつて作家・芸術家で組織されたソビエト訪問団に加わり、ソ連を見て回ったことがあったが、そのときの感想は、とてもあそこで暮らす気になれない、クーダム（ベルリンの繁華街、クアフュルステンダム）に来るとほっとする、というものだった[1]。そんなときミュンヘンから仕事の誘いがくる。仕事を持ってきたのはアメリカ軍の将校だった。アメリカ軍はミュンヘンを含むバイエルン地方を占領しており、占領地区の民心を安定させるために新聞や子ども向けの雑誌を発行しようと計画していた。新聞の文芸部門と子ども雑誌の編集長としてケストナーに白羽の矢を立てたのである。

もっとも活動再開に当たっては占領軍による身体検査があった。ドイツの有力な作家で、ナチスに迎合しなかった作家は大抵が亡命していた。そのため亡命もせず、投獄もされなかったケストナーは何らかのナチスへの協力を疑われたのである。1933年以前のケストナーは明らかにナチスに対して批判的であった。しかし1933年には作家の武器である執筆を、原稿を発表することを禁じられている。つまり批判しようにも発表の舞台はなかったのである。このことが結果としてケストナーの命を救うことになった。

日本で刊行されたケストナーの伝記には「ナチスに抵抗した」という副題が添えられることがある[2]。けれども目に見える形で抵抗したわけではない。そんなことをすればたちまち命に関わった。ナチスといえど最初から周辺諸国と戦争をした訳ではない。選挙で、つまり、国民の支持で勢力を伸ばしてきた政党である。子どもの本の人気作家をいきなり目に見える形で迫害したりはしなかった。外国でも著名な作家は外貨も稼いでくれるので、むしろ有用であった。ナチスの方針としてはまずは嫌がらせ（預金の封鎖や微罪での逮捕）をして、力を見せつけておけばよかったのである。ケストナーはこの間に、たとえ匿名、仮名で書くにしても明白な反抗の意図を見抜かれては命に関わることを学んでいた。つまり、ケストナーが生き延びるためには無害な文章を密かに書くしかない。こうすることでドイツ内にとどまることができたのである。したがって戦後になって振り返るとナチスに抵抗した証拠もないが、協力した証拠もないことになる。占領軍も明白な証拠を押さえられない作家にいつまでも疑いの目を向けているわけにはいかなかった。民情を安定させる占領政策は軍事面ばかりでなく、文化面でも必要だったからであり、そのために文筆力もあり、人望もあるケストナーは欠かせなかったのである。

3．ケストナーの主な活動

ケストナーは亡命可能だったにもかかわらず、そうしなかった者として執拗な尋問を受けたが、最終的に1946年３月５日に「非ナチ化裁判所」から無関係の通知があり、公式にナチスとの関係性が否定された。こうしてようやく公然と社会活動が再開可能となった。ケストナーには作家、ジャーナリストとして大いに需

[1] Kästner, Erich：Auf einen Sprung nach Rußland. in „Das neue Rußland“　1930, 5/6 S. 33 及び　佐藤和夫「メッセージから記述へ」千葉工業大学研究報告　人文編　第26号、1989年、85頁

[2] 高橋健二『ケストナーの生涯』（駸々堂、1981年）には「ドレースデンの抵抗作家」、クラウス・コルドン（那須田淳、木本栄共訳）『ケストナー』（偕成社、1999年）には「ナチスに抵抗し続けた作家」の副題が添えられている。

要（質の高い文章を期限内に仕上げるという類いまれな才能）があったのである。彼は自分の優位な立場を確保すると自作の発表にとどまらず、戦前からのベテラン作家から戦後デビューする若い作家たちに至るまで幅広く発表の場を仲介して復活や新たな進出に貢献もした。

この時期のケストナーの仕事についてキーワードを挙げると：

① 新聞「ノイエ・ツァイトゥング」（1945-1955）
がさしあたり活動の拠点となり、次いで
② 児童雑誌「ペンギン」（1946-1948）
にも請われて助力した。こうした活動の中で、特に児童文学の分野で同じ理想を抱いて行動したのが
③ イェラ・レップマン（Jella Lepman, 1891-1970）
だった。レップマンとケストナーが協力して、児童文学のグローバルな交流の拠点として誕生したのが、
④ 国際児童図書館 （Internationale Jugendbibliothek）
であり、彼女のアイデアを基にして生まれたのがケストナーの
⑤ 『動物会議』（„Die Konferenz der Tiere“, 1949）
である。加えてケストナーは大人のエゴで家庭が崩壊したため辛い思いをする姉妹を描いた
⑥ 『二人のロッテ』（„Das doppelte Lottchen“, 1949）
を完成させた。
⑦ 『独裁者の学校』（„Die Schule der Diktatoren“, 1956）
を発表して演劇部門でも作家としての復活を果たそうとした。

① 「ノイエ・ツァイトゥング」（以下この新聞をNZと略記する）

ケストナーの、戦後最初の言論・出版への関わりはこの新聞から始まった。アメリカ軍に後押しされたこの新聞でケストナーは「学芸欄」（Feuilleton）の責任者を務め、自作を発表する傍らナチス体制下で「退廃的」との烙印を押され、排除された作家、評論家、研究者らの復権に助力した。

② 児童雑誌「ペンギン」

この雑誌はドイツの有力な出版社であるローヴォルト社から刊行された。関わるようになったのはローヴォルトがアメリカ占領軍に発行の許可を求めたとき、ローヴォルトとは別の発行人を求められ、ケストナーが担ぎ出されたからである。ただNZとは異なり、ケストナーは雑誌の立ち上げ構想に関わった程度で、名目的な発行人であった。もともとNZの仕事が忙しく、実質の責任者を務めるには無理があった。とは言え、原稿はほぼ１号おきに、計25編書いている。これらのうちいくつかは後にケストナーのエッセイ集、『日々の雑録』（„Der tägliche Kram“, 1948）と『小さい自由』（„Die kleine Freiheit“, 1952）に収録されている[3]。

③ イェラ・レップマン

レップマンはユダヤ系産業資本家の出身で、夫が戦争で負傷し、亡くなった後に積極的に仕事にも政治にも参加するようになった。政治家としてはドイツ民主党員として活動し、ナチス政権成立後の1936年にロンドンに亡命した。ラジオ放送局での勤務を中心に文筆活動も行った。彼女が放送局で担当した青少年問題分野での活動は戦後アメリカ軍占領期のドイツにも引き継がれ、アメリカ軍司令部での青少年問題部門にも携わっている。

1946年以降は廃墟と化したドイツで子どもに図書を提供する活動を行い、絵と本の展覧会を開催する。さらに下記に述べる国際児童図書館を設立し、館長となった。1953年にはレップマンの提唱でスイスのバーゼルにInternational Board on Books for Young People（国際児童図書評議会：児童文学の研究・調査、発展途上国での子どもの本の普及や、本を介しての世界中の子どもたちとの国際交流などを主な目的として活動）が設立され、初代の議長となった。1956年には子どもの本を通じた国際理解、及びこの分野での創造的活動が評価されて国際アンデルセン賞名誉賞が授与された。1956年から翌年にかけて発展途上国を訪問し、児童文学を発展の促進に役立てるようユネスコ（国連教育科学文化機関）に働きかけている。

晩年はチューリヒに住んで、記者の仕事をし、組織作りの活動に励んだ。ヨーロッパ児童文学分野の発展に大きく貢献した人だった[4]。

④ 国際児童図書館

上記レップマンは児童文学分野でケストナーを物心両面から強力にサポートした。彼女との協力で生まれたのがこの児童図書館である。設立のアイデアは1946年末にNZ紙上で発表され、1948年12月には「国際児童図書館友の会」が結成された。この友の会はミュンヘン市、ロックフェラー財団、ドイツ連邦政府、さらにユネスコからの資金援助と世界23ケ国から図書の寄贈を受け、1949年に開館の運びとなった。この図書館は小ぶりな城砦を転用したもので、かわいい夢のある外観をしている。

⑤ 『動物会議』

この絵本もイェラ・レップマンのアイデアに基づいている。やり手の女性に励まされて書き出すところは最初の子どもの本『エーミールと探偵たち』に似ている。エーミールの場合は現実に根ざした、子ども時代のケストナーの環境に近い世界のお話であるが、これはあらゆるものが逆転した、まったくの空想の世界、

[3] 前者には小松太郎による翻訳、エリッヒ・ケストネル『現代の寓話』（文藝春秋社、1950年）があるが、後者にまとまった翻訳はない。

[4] Doderer, Klaus：Lepman, Jella. In：Doderer, Klaus（Hrsg.）：Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur. 2. Band, Weinheim/Basel, 1977, S. 343f.
https://de.wikipedia.org/wiki/Jella_Lepman,（2021. 10. 15）

ユートピアを描いている。この点で『動物会議』はタイトルからすでに非現実の世界を指している『五月三十五日』と同系列の作品と言える。

そして全体を貫くテーマは「戦争・貧困・革命」がなくなることであり、そのキーワードは「子どものために」である。重い主張・要求を考えるとこれはかなり年長の子ども向けでもあり、大人向けでもある。このように内容と外見にややへだたりはあるが、ケストナーの筆力と『エーミールと探偵たち』以来のコンビである・ヴァルター・トリヤーの絵で十分楽しませてくれる作品に仕上がっている。

⑥ 『二人のロッテ』

両親の離婚によりそれぞれ別の環境で育った双子の姉妹が夏の林間学校で偶然知り合い、入れ替わって父と母の復縁を目指す物語である。そもそも両親が別れる原因を作ったのは、家庭を持っておきながら、「自由になりたい」という利己的な願望をもった父親であった。しかし彼はいったんこの「自由」を得ると今度は家庭を守ってくれる人の不在を嘆くことになり、新しい妻がほしくなる。父の身勝手さを健気に、そして果敢に乗り越えて双子の姉妹はようやく一つの家庭で暮らせることになる。執筆当時の戦争による都市破壊や戦後の物資不足には触れずに昔ながらの都市生活を描き、父親の身勝手さを克服し、いったん別れた両親を再び結びつけるために解決困難な共同プロジェクトに果敢に立ち向かった双子の姉妹の成長を描く現代のメルヘンとも言える物語である。

⑦ 『独裁者の学校』

全９場で構成された戯曲である。ケストナー自身にとっては「独裁」の問題そのもの、あるいはその発生に切り込もうとした野心作ではあるのだが、ほんの少し前の、実際の独裁体制とは直接関係はなく、しかもその独裁者は「学校」の教授たちに訓練され、養成されるのである。読み物としてはともかく、舞台にかけるには観客を満足させる要素に欠けていた。本人の期待に反して公演を引き受ける劇場は本拠地であるミュンヘンを除くとほとんどなかった[5]。

４．「小人」の物語

(1) 「小人」の大きさ

そもそも「小人」はどのくらいの身長を有するものなのだろうか。ドイツで出版されている「迷信事典」には事細かに以下のように列記されている。

・親指くらい
・指の長さ
・手のひら
・握りこぶし
・指と指の間
・エレ尺（50～ 80センチ）、あるいはその半分
・砥石の枠板、ナイフのさや、もみの木の実
・靴のサイズ
・猫が立ち上がったくらい
・人形
・生後６週間くらいの子ども
・椅子の脚

以上のように一義的な大きさに収束することはなく、同書でも最初に述べているように「漠然と」しており、要するに「小さい、とても小さい」のが「小人」なのである[6]。

(2) 大きさ以外の特徴・特質

では「小人」には大きさ以外にどのような特徴・特質があるのだろうか。やや大雑把なまとめ方ではあるが、ヨーロッパと日本ではかなり違いがあるように見える。

1) ヨーロッパ
・集団で暮らし、服装にも特色（赤い三角帽など）がある
・たいてい地下で暮らしている
・習性としていたずら好きだが、概して親切（例：「小人の靴屋」）
・すぐれた技術（例：服の仕立て、鍛冶、宝飾）や魔力（例：錬金術、占い）をもっている

2) 日本
・待望された子どもとして生まれる（例：一寸法師、すねこたんぽこ*、五分次郎）
　*「すねこ・たんぽこ」とも
・基本的に魔力はないが、知恵と勇気がある
・神話：スクナヒコナ、オオクニヌシと組んで国づくりをする
・アイヌ民話のコロポックルも小人の神様で、人間が悪さをしない限り害を及ぼさない[7]

(3) ケストナーの「小人」

ケストナーの描く小人も概ねヨーロッパの伝統的な小人像に沿っている。

・チェコにあるとされる小人の村に住んでいる
・いたずら好きだが、悪気はない。知恵も勇気もある
・すぐれた能力（器械体操）をもつ

ただし現代の小人の特徴として魔力はもたない。この特徴をよく示しているのがメアリー・ノートンの『床下の小人たち』（1952）である。この作品の小人たちは他人の住居の床下に住み着き、足りないものをこっそりと家主から借りて暮らしている。しかしケストナ

[5] Hanuschek, Sven：Keiner blickt dir hinter das Gesicht. Das Leben Erich Kästners. München/Wien, 1999 S. 390ff.（以下本書によるときは „Hanuschek“ と略す）ケストナーは長編小説も手がけたが未完に終わっている（佐藤和夫「執筆禁止時代のケストナー（Ⅷ）―二つの小説断片について」、茨城大学人文学部紀要「人文学科論集」第43号　2005年参照）

[6] Hanns Bächtold-Stäubli（Hrsg.）：Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Bd. 9, Berlin/New York, 1987, Sp. 1008ff.

[7] 西本鶏介『こびと』、絵本メルヘン博物館シリーズ、佼成出版社、1995年、４頁以下

ーの小人は姿を隠すことなく、村を作って公然と暮らしている。それどころか「小人」、メックスヒェンの両親は通常の人間世界での成功を求めて村を出る。両親の身長は出身地のピヒェルシュタイン村の人々と同じくらいのようなので、50cmくらいはありそうだが、二人から生まれたメックスヒェンはその十分の一くらいしかない。とはいえ、社会的上昇意欲は両親譲り、いやそれ以上に持っている。

5.『小人』と『小人と小人のおじょうさん』

ケストナーは最初のサナトリウムでの療養中に子どもの本を2冊書いている。どんな内容なのか、まずは第一作の『小人』から紹介する[8]。

(1)『小人』

冒頭で主人公メックスヒェンの両親がチェコの故郷から大都会での成功を夢見て旅に出る。彼らの身体能力はサーカス団に認められ、アクロバットの芸人としてデビューする。二人のサーカスでの演技は人気の的となる。やがてとても小さな子どもが生まれる。しかし、この赤ん坊の両親はパリでエッフェル塔を見物している時に展望塔から吹き飛ばされ、行方不明となってしまう。ここまでが言わば物語の前置きである。

残された小人は同じサーカスの奇術師、「教授」ことヨークス・フォン・ポークスに引き取られ、育てられる。以後は小人の成長物語として展開する。

ポークスは小人を一般の親によくみられるように知的職業に進ませようとするが、メックスヒェンは拒否して芸人になろうとする　→　小人はまず猛獣使いの芸に挑むものの、動物たちに相手にされず失敗する　→　そこでメックスヒェンは教授の弟子となって奇術を学ぶことにする　→　メックスヒェンと教授は新しい芸の練習を始める　→　メックスヒェンと教授はサーカス公演中の事故の穴埋めとして予定より早くデビューすることになる　→　小人のデビューは大成功を収める　→　メックスヒェンは師匠であるポークスに技を認められる　→「幕間劇」として小人の夢（小人は並の大きさになってかえって困ったことになる）がはさまれる　→　この夢を通じて小人には小人の価値があることを確認する（アイデンティティーの確立）　→　小人はサーカス団で稼ぎ頭の芸人となるが、人として金銭よりも信義が大切なことを学ぶ（教訓の提起）　→　両親を失った子どもが芸人として世界的な成功を収める（クライマックス）　→　順調な展開に影が差し、小人は誘拐される　→　捕らわれた小人は知恵を働かせて捕らわれの場から逃れ出る　→　体が小さい故に移動に困難をきたしていた小人は一人の少年助けられる　→ 小人と少年の協力より犯人が逮捕される（危機の解決と友情の誕生）

山あり谷あり、喜怒哀楽の書き分け、筋の運び、夢を用いた幕間劇も用意するなどよくできた展開で飽きさせない。最後には人気者になった小人の誘拐で緊張感を高め、一人の少年の助けで見事に事件が解決に導かれ、読者の溜飲を下げさせる。ケストナーとしては手慣れた、順当な書きぶりであり、当然の出来栄えとも言える。

(2)『小人と小人のおじょうさん』（高橋健二による訳名は『サーカスの小人とおじょうさん』）

一方『小人と小人のおじょうさん』の方はどうか。前作が21章で構成され、緻密な組み立てをしているのに対してこちらはページ数は増えているものの、章の数は半分以下しかない。

第1章：誘拐犯二人の取り調べと映画プロデューサーの来欧
第2章：映画化交渉
第3章：交渉の成立
第4章：刑務所から前作の誘拐犯が消える
第5章：映画撮影が始まる
第6章：小人の両親の故郷の村でのロケ、ギャング団の捜査を指揮する警部の報告
第7章：ブレガンツォーナ王国訪問
第8章：ルガーノ旅行
第9章：小人のおじょうさんの登場

この続編の特色は筋が二つに分化していることにある。一方ではサーカスで教授とともに活躍する小人の映画が制作され、他方ではシュタインバイス警部率いる捜査チームが南米を拠点とするギャング団の首領（前作で小人の誘拐を命じた）の捕縛に向かうことである。捜査チームは映画ロケ隊を装うことから両者を結びつける要素、とりわけ映画プロデューサー、ドリンクウォーター氏の介在はあるのだが、結びつきはかなりゆるい。やがて映画は完成するものの、ギャング団の首領には逃げられてしまい、捜査は完結しないままに終わる。以上が第6章までのお話である。

この不完全さを補うのが第7章以降の三つのエピソードということになる。一つはブレガンツォーナ王国の訪問である。ブレガンツォーナはブリタニカ百科事典にしか出ていない地名とされているが、実はこの地名はスイスのルガーノにある。ここはケストナーが療養していた病院を含む地域であり、きわめて身近な地名なのである。自分の周辺にある固有名を転用するのはケストナーの子どもの本へのデビュー以来の手法でもある。

二つ目は第8章でのスイス旅行であり、ここで教授は自分が結婚を控えていることと小人の将来も見据えて共同の邸宅を購入したことを明らかにする。残り2章となったここに至ってようやく本来中心テーマであ

[8] 高橋健二による邦訳名は『サーカスの小人』、岩波書店、1964年

るはずの「小人のおじょうさん」が三つ目のエピソードとして話題となり、第９章で実際に登場してメックスヒェンと小人のおじょうさんことエミリー（愛称：ミールヒェン）の話が展開する。

しかしここにも問題が潜んでいる。

1）ミールヒェンは運動が不得意で料理が上手

2）自分たちの家で「ごっこ」遊びをするメックスヒェンとミールヒェンは見事に旧来型の、性別分業のおとうさんとおかあさんを演ずる

ケストナーの家庭観が強く反映しているように見えるし、類型化した人物像は現代の観点からずれてしまっている。

もう一つの問題はケストナーのヒット作の続編（例は少ない）には主人公の、よく言えば成長、つまり年齢が進んでしまうことがある。その結果、言葉遣いや振る舞いがやや乱暴になり、この作品では性的なことさえも口をついて出る。最初の作を楽しんだ子どもが時を経ずに次作を読む際に違和感が生まれるし、その子どもが内容にふさわしい年齢に達したときは緊張感に欠け、まとまりのゆるい第二作にはもう見向きもしないかもしれない。

いずれにせよ物語の展開は散漫であり、内容にも共感が持てない部分がある。しかもタイトルとその中身は「羊頭狗肉」（立派なタイトルを掲げながら、内容は期待する展開からはずれている）と言えなくもない[9]。訳者の高橋健二も巻末の作者紹介の中で戸惑ったような書き方をしている。

> 「おもしろいことは正編以上であるが、作者は空想におぼれて、空転している感じがある。そのせいか、ケストナーの作品はほとんどすべてその後もいろいろな形で重版されているが、この作品はそうではない。」[10]

一方でケストナーについて詳細な伝記を書いたS.ハヌシェクは二編の『小人』に高い評価を与えている。

> 「ケストナーの最後の長編二つは並外れて生気に富んでいて、子どもにふさわしいものに仕上がっている。『動物会議』では部分的にとどまってしまっている。隅々まで愛情に満ちており、実際の読者に向けて書かれたことはまちがいない。実際の読者とはケストナーの息子その人のことだ。」[11]

上記の「小人」をタイトルに持つ二編を一括りにした高い評価は息子トーマスに直接インタビューしたことから非常に身近に、「生気に富」んでいるように感じたのかもしれない。むしろ本音は以下のような部分にあると思われる。

・「同時にこの二つの作品ともゆるく、遊びに過ぎているような感じがする」

・「登場人物はみな伝統的・慣習的性別分業にとどまっている」

・「ケストナーの子どもの本では初めて性的なほのめかしが出てきている」[12]

ただ第一作の『小人』に関しては少なくともケストナーに近い人たちや関係者の評判は、入院したケストナーを励まそうとする気持ちがあったのかもしれないが、よかった。確かに少し冗長な面はあっても読み聞かせてあげるなら幼い子どもにも、自分で読むならもう少し年上の子どもにもおもしろいお話に仕上がっている。

ケストナーの生誕百年の機会に前述のハヌシェク以外にもう一つの大きな伝記が出版されている。そこにおける『小人』についての言及を見てみると、

> 「[...]　ケストナーの力と信頼の源は彼の子ども時代の記憶だった。そこから自分の信念が、経験に反することがあっても、確固たる期待が生み出されたのである。この源にケストナーは六十歳を越えてもどっていった。自分の息子のために「メックスヒェン・ピヒェルシュタイナー」の冒険物語を創り出した。それらが『小人』と『小人と小人のおじょうさん』というケストナーの文学創造の最後の作品となった。―愉しげで、穏やかな終止和音のように。」[13]

とある。作品の内容についての論評はない。

『小人』は手放しで評価はできないけれども、ケストナーが新しい分野を開拓としたと評価できる。『小人と小人のおじょうさん』の方はエピソードがだらだらと続く印象を与え、大人の読者が読むのにはつらいように感じる。

6．ケストナーと女性

ケストナーは正式には一度も結婚していない。ただ、女性との交際は多彩で、活発で、まめであった。それ故、法的・倫理的に制約が少ない立場を選択したのかもしれない。短期間の交際を除いて伝記作者は以下の４人の名を挙げている[14]。

○　ルイーゼロッテ・エンダーレ

○　ヘルガ・ファイト

○　バーバラ・プライアー

○　フリートヒルト（フリーデル）・ジーベルト

---

[9] 現在は見えなくなっているが、例えば通販サイトのアマゾンには以下のような読者評が掲載されていた。
「サーカスの小人が面白かったので購入したのですが……期待外れ。まあケストナーもこういう事もあるのかなと。ただもう手に入らない本だからかも知れないけれど値段が本質に合わない［…］」https://www.amazon.co.jp/productreviews/4061471805/ref＝acr_dpproductdetail_text?ie＝UTF8&showViewpoints＝1,（2018.5.12）

[10] 高橋健二「ケストナーの生涯　増補版」、駸々堂出版、1982年、229頁以下

[11] Hanuschek, S. 413

[12] Hanuschek, S. 414

[13] Görtz, Franz Josef und Sarkowicz, Hans：Erich Kästner. München, 1999, S. 290f.

[14] Hanuschek, S. 364ff.

ファイトとは1948年のクリスマスパーティーで知り合った。彼女はその頃まだ二十三歳で、息子が一人いるシングルマザーだった。50年代半ばになってどちらからともなく交際は絶えた。

プライアーは役者の卵で、ケストナーが関わったミュンヘンの小劇場「シャウブーデ」の舞台に端役として出演しており、すでにケストナーとは旧知であった。1949年の謝肉祭の時期に開かれたパーティー以降に両者の仲は深まった。このとき、彼女は三十一歳で、ファイトと同様息子が一人いるシングルマザーだった。この関係は７年ほど続いている。

より重要なのはエンダーレとジーベルトである。前者はケストナーの妻と言って差し支えないほど近い関係にあり、結婚していないために「夫人（Frau）」ではなく、「人生の伴侶（Lebensgefährtin）」と呼ばれていた。後者のジーベルトはケストナーとの間に子ども一人を生している。ケストナーの唯一の子ども、息子トーマスである。

(1)　ルイーゼロッテ・エンダーレ

エンダーレの名は前述の『二人のロッテ』に、ヒロインの双子の姉妹、ルイーゼとロッテに分け与えられている。それほど彼女はケストナーの生涯にわたって縁の深い人だった。知り合ったのは彼のライプツィヒ時代である。ジャーナリズムの編集者として活躍し、ケストナー同様ライプツィヒからベルリンへ出て、仕事を続けた。

ケストナーは第二次世界大戦が始まって以降何度か危機に見舞われるが、とりわけ生命の危機にさらされたのが、空襲被害（1944年２月）とソ連軍の侵攻によってベルリンが陥落する直前であった。空襲で家を失ったケストナーはエンダーレの住まいに同居することで救われた。また1945年３月にはナチスが敗戦の前に危険と見なした人物を皆殺しにするという物騒な噂が流れたが、それまでのナチスのやり口からするとまんざら虚偽であると聞き流すことはできなかった。この未確認情報を確かめ、ケストナーが映画撮影隊の一行に紛れて、オーストリアのチロル地方へ脱出するよう手配したのもエンダーレであった。

(2)　フリーデル・ジーベルト

エーリヒ・ケストナーとフリーデル・ジーベルトは1949年、彼女が二十三歳の時に知り合い、八年後にトーマスが誕生した。役所に届け出てこの息子がケストナーの子であることが認知されたのはさらに七年後の1964年であった。この息子のために書いたのが、本論で取り上げたケストナーの最晩年の子どもの本、『小人』と『小人と小人のおじょうさん』である。

子を生したジーベルトは当然正式な結婚と家庭生活を求めるが、そうはならなかった。長年苦労をともにしたエンダーレの強い抵抗があり、一つの家庭を築き上げることはできなかったのである。子ども時代のケストナーの場合も父エーミールは影の薄い存在であったが、本人もまた不本意ではあったろうが子どもにも、家庭でもしっかりした根を持つ父親として相対することはできないままとなった。愛情を育てられなかった二人はケストナーの死の五年前に突然別れている[15]。

７．晩年

ケストナーは以上見てきたように50年代半ばまで需要の多い作家として華々しい活躍をした。それに比して60年代はいかにも晩年という状況になる。病気がちとなり、活動範囲が次第に狭まり、停滞するようになった。

(1)　病気の進行

五十代（つまり1950年代とほぼ重なる）の初め、ケストナーの上あごにはすでに歯（おそらく奥歯）が一本もなかった。そのため見栄えも悪く、食べても味覚に乏しかった。1951年には道路上の砂利の山に躓いて倒れ、そのために残っていた歯もブリッジを含めすべて折れてしまった。1958年夏にはテニス中にスズメバチに左足を刺されたが、医師の診察を受けないままにさらにテニスを続けているうちに、今度は右足を蹴飛ばしてして穴が開いてしまう。それがもとで重い感染症となった[16]。

(2)　最初の入院

1961年秋、ケストナーはウィーンに出かけ、市の公会堂で４日間、計四部からなる連続講演をそれぞれ四千人の聴衆を前に行った。その途中で激しい痛み（後に坐骨神経痛と判明する）に見舞われたが、痛み止めを飲んで講演会を乗り切った。加えて講演終了後３時間にわたるサイン会があり、これもやり抜いた。その間痛み止めを飲み続け、胃は薬で膨れ上がり、胃痙攣を引き起こした[17]。

ミュンヘンに戻ると、即入院となった。検査の結果、結核による肺の浸潤も判明する。結核となれば、隔離が必要であり、ケストナーは転地療養を決断する。1961年１月下旬にルガーノ（スイス南部、テッィーノ州）にある湖を見下ろせるアグラ村にあるサナトリウムに入院した[18]。

---

[15] 上述のようにケストナーは生涯一度も正式な結婚はしなかったし、「多情」と言っていいくらい女性関係は豊富であった。素性の知れない女性との交渉で病気に感染し、児童文学の作家としての名声を傷つけるおそれさえあった。もっともそれはベルリンへ転居してからの話で、学生時代はまだふつうの若者として同世代の女性と恋愛し、破局を迎え、傷ついている。そのことについては、佐藤和夫「ケストナーの学生時代」、茨城大学独文学論集　第１号、2001年、77頁以下参照。

[16] Hanuschek, S. 394ff.

[17] Hanuschek, S. 428

(3) アグラでの療養生活

ケストナーの療養生活は17ヶ月に及んだ。トーマス・マン（1875-1955）の『魔の山』（1924）の主人公であるハンス・カストルプ青年の７年ほどではないが、短くはない。よい薬がない時代には根治はなかなか困難だった。効果があるとされたのが、涼しく、乾燥していて光があふれている場所、つまり高原や海岸だった。そのため結核療養所（サナトリウム）はそのような場所に建設され、患者は辛抱強く治療を受けなければならなかった。

幸い、第二次世界大戦後には優れた抗結核薬が開発されたことからケストナーの回復振りは良好であった。裕福なケストナーは病院であるが故の制約（食事制限と時間の縛り）を除くとグランドホテル並みに優雅に過ごすことができた。気に入りの店に出入りし、ヘルマン・ヘッセなど著名な作家たちを訪問した[19]。またケストナー自身が文壇の重鎮でもあったから訪問客も次々にやってきた。

仕事にも着手し、旧作を映画台本に改作したり、子どもの本を舞台用にする手直しも行った。回復振りに自信を持ったケストナーは新しい子どもの本にも取り組む。これが『小人』となって結実した。しかし、健康が回復し始めると以前の悪癖が頭をもたげてくる。

1) 飲酒（しかもウィスキー）
2) 喫煙（しかもニコチン度の高い「キャメル」）
3) 夜更かし（ケストナーは若い頃から夜型であった）

いずれも健康を害する原因となるものばかりである[20]。

(4) 二度目の入院

二度目の入院は結核よりも神経のせいだとされている。最初の長い入院の後ケストナーは

1) 二重の生活：エンダーレとフリーデルの二つの住まいを５週間ずつ交互に移り住み、
2) 必要な栄養を食べ物よりも飲み物で摂った（ウィスキー、ビール、コーヒー）、食べ物と言えばゼンメル（小さい丸パン）、あるいは野菜サラダくらいに過ぎなかった。

二人の女性の間を行き来するのは妥協の産物（子どもと愛人に会いたいのは山々だが、だからと言って命と仕事の恩人であるエンダーレを突き放すこともできない）だったが、本人の精神的負担は重かっただろう。何しろこのようなケストナーにとって虫のよい状況は二人の女性にとっては全く受け入れがたい。それどころか特にエンダーレのすさまじい怒りを引き出した（彼女の憤りが物の破壊に向かったところから、家の中はぼろぼろになったと伝えられている）。

不摂生による肉体の衰弱とヒステリーの攻撃対象となったことによって精神を消耗した結果、ケストナーは1964年１月に再び入院を余儀なくされる。再度の入院に対して医師たちは厳しく指導し、酒、タバコ、外出を禁じた。食事療法も厳格に守らせた。その結果、最初の入院より短い期間で、1964年８月にはミュンヘンに戻ることができた[21]。

(5) 最後の入院

七十代のケストナーにはもはやかつてのような精悍で、しゃれた面影が失われていた。ケストナーを1973年秋にインタビューしたジャーナリストのヒルデ・シュピールは「エーリヒは分別を絵に描いたよう男だったのに、肉体上の本能にはほとんど分別が働かなかった。年老いても賢明であるには体を大切にしなければならないのに、まるで我慢しなかったのだ。」と伝えたそうである[22]。この頃にはケストナーはもうすでに食道癌を患っていて食事はスープや果汁など流動性のあるものが中心だった。肉など固形の、たんぱく質を摂るのに役立つ食品はほんの少ししか口にすることができなかった。

1974年７月25日に三度目の入院をする。今度の入院はわずか四日間だった。ただし、生きて退院することはできなかった。享年七十五歳であった。遺体は本人の希望により火葬され、ミュンヘン市のボーゲンハウゼン にある聖ゲオルク墓地に葬られた[23]。

8．まとめに代えて

ケストナーは1969年に自分の七十歳を祝ってくれた人たちに以下のような詩を答礼として贈った。

「祝ってくださったみなさまに

年は取りたくなくても容赦はありません
六十になったかと思うと、もう七十です
はて、と戸惑ったところで
八十への道がとどまることはありません。

[…]
おなじみの方にも、そうでない方にも
どうぞよろしくお願い申し上げます
胸はいっぱいですが、心はほがらかです
感謝します。これからもがんばります。

---

[18] Hanuschek, S. 405ff.
[19] ヘッセは人生の後半生をスイス・テツィーノ州のモンタニョーラ村で過ごした。モンタニョーラとアグラ間の距離は２km程度である。
[20] Hanuschek, S. 409f.
[21] Hanuschek, S. 428
[22] Hanuschek, S. 428
[23] Enderle, Luiselotte：Erich Kästner. Reinbeck bei Hamburg, 13. Auflage. S. 135

1969年　エーリヒ・ケストナー」[24]

老いは深まりつつあったが、なおも生きる希望はあったのである。ケストナーには作家や公的団体の長としての表の顔と、女性関係を中心とする裏の顔があった。表ではまさに誠実に仕事を果たした。自分のためでもあるが、作家仲間や出版社、そして読者のために病気を押して奮闘した。その一方で裏の、プライベートでは平穏な家庭を作ることには失敗し、何人もの女性と関係を持ち、子どもまでもうけたが、結局は別れて、子どもとも温かい関係は築けなかった。

そして第三帝国時代のことをまとめれば、彼はプライベートの部分ばかりではなく、公的な部分でも「綱渡りの人生」を送ったのである。それなのになぜ「ヒトラーに抵抗した作家」とされたのか。これには日本独特の事情があるようだ。おそらく日本で一番有名なドイツ人はヒトラーであり、悪逆非道の独裁者であることもよく知られている。そのヒトラーに抵抗したとのタイトルが多くの人を引きつける効果を見込んで、便利なキャッチフレーズとして使われ続けているのだろう。実際にはスヴェン・ハヌシェクによる伝記の翻訳書に付されたカバーや帯に書かれている惹句「謎を秘めた啓蒙家」や「綱渡りの人生」の方が実態に近い。

本稿の締めくくりとして一年が巡り、新たな循環、新たな暦の始まりへの期待を語るケストナーの最晩年の詩、「十三月（じゅうさんがつ）」の抜粋を掲げることにする。

「十三月

もしそんな月があったら、どんな感じだろう
年わたり月、それともあやかし月とでも言うだろうか
十二で十分な人にはどうでもよいことだけれど
十三番目があったら、どんな感じだろう

春にはかわいい花が咲き
夏祭りにはジャスミンやバラの花があって
秋には枝にリンゴがふっくらとした
赤や黄金（こがね）の実をつけるだろうか
[…]

時は重なり、年はめぐる
いつものことながら、なるようにしかならないもの
しんぼう、しんぼう、旅はぐるりとめぐって
やがて十二月が終われば、一月になる」[25]

［参考文献］

Kästner, Erich：Gesammelte Schriften. 7 Bde. Köln/Berlin, 1959

Kästner, Erich：Werke in neun Bänden, hrsg. von Görtz, Franz Josef, München/Wien, 1998

Kästner, Erich：Auf einen Sprung nach Rußland. In „Das neue Rußland“　1930

ケストナー、エーリヒ（高橋健二訳）「ケストナー少年文学全集」 全９巻、岩波書店、1962-1964年

ケストナー、エーリヒ（高橋健二訳）『サーカスの小人とおじょうさん』、講談社、1969年

ケストナー、エーリヒ（吉田正己訳）『独裁者の学校』、みすず書房、1959年

Bemmann, Helga：Humor auf Taille. Erich Kästner — Leben und Werk. Berlin, 1983

Doderer, Klaus（Hrsg.）：Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur. 3 Bde. u. e. Ergänzungs- und Registerband, Weinheim/Basel 1975-1982

Enderle, Luiselotte：Erich Kästner. 13. Auflage. Reinbeck bei Hamburg, 1992

Görtz, Franz Josef und Sarkowicz, Hans：Erich Kästner. Eine Biographie. München/Zürich, 1998

Bächtold-Stäubi, Hanns（Hrsg.）unter Mitw. von Hoffmann-Kayer, Eduard：Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Bd. 9 Nachdr. Berlin/New York 1987

Hanuschek, Sven：Erich Kästner. 3. Auflage. Reinbeck bei Hamburg, 2015

Hanuschek, Sven：Keiner blickt dir hinter das Gesicht. Das Leben Erich Kästners. München/Wien, 1999（藤川芳朗訳「エーリヒ・ケストナー――謎を秘めた啓蒙家の生涯」、白水社、2010年）

Kordon, Klaus：Die Zeit ist kaputt. Die Lebensgeschichte des Erich Kästner. Weinheim/Basel, 1994, 1998（那須田淳、木本栄 共訳『ケストナー』、偕成社、1999年、「[...] 本書を忠実に訳した上で、各章ごとに必要な情報を整理して [...] 日本語化していく方式をとった」、「訳者あとがき」より、同書383頁）

List, Sylvia（Hrsg.）：Das große Erich Kästner Buch. München/Zürich 1975（丘沢静也・岸美光・初見基訳『大きなケストナーの本』、マガジンハウス、1995年）

桜井徳太郎『昔話の民俗学』、講談社（学術文庫）、1996年

佐藤和夫「メッセージから記述へ」千葉工業大学研究報告 人文編　第26号、1989年

佐藤和夫「ケストナーの学生時代」、茨城大学独文学論集 第１号、2001年

佐藤和夫「執筆禁止時代のケストナー（Ⅷ）― 二つの小説断片について」、茨城大学人文学部紀要「人文学科論集」第43号、2005年

高橋健二『ケストナーの生涯』駸々堂、1981年

西本鶏介『こびと』、絵本メルヘン博物館シリーズ、佼成出版社、1995年

日本民話の会（編）『決定版　日本の民話事典』、講談社（α文庫）、2002年

[24] List, Sylvia（Hrsg.）：Das große Erich Kästner Buch. München/Zürich 1975, S. 346

[25] Kästner, Erich：Werke. Bd. 1, München/Wien, 1998 S. 313f.

柳田国男『桃太郎の誕生』、角川書店（文庫、改版４版）、1976年

https://de.wikipedia.org/wiki/Jella_Lepman,（2021. 10. 15）
https://www.amazon.co.jp/product-reviews/4061471805/ref=acr_dpproductdetail_text?ie=UTF8&showViewpoints＝1,（2018.5.12）

付記：本稿は2021年４月17日に茨城県立図書館において開催された令和３年度ライブラリー講演「エーリヒ・ケストナーの後半生と『小人』の物語」の後半部分を再編し、加筆修正したものである。

（2021年10月27日受理）